〈夜間セミナー記録刊行〉

何春蕤著　舘かおる・平野恵子（共編）
大橋史恵・張瑋容（共訳）
『「性／別」攪乱――台湾における性政治』
（御茶の水書房　2013年　295頁　ISBN：978-4-275-01055-1　3,800円＋税）

舘　かおる

1996年５月に設立されたジェンダー研究センター（以下IGSと略）は、その前身の女性文化資料館及び女性文化研究センターと同様に、文部省令では10年の時限付きの学内共同研究教育施設であったが、新たに外国人客員研究員制度が認められたことは、IGSの活動をより活発で多彩なものにした。しばらくは、欧米の大学や研究所所属のジェンダー研究者を招聘することが比較的多かったが、次第にアジア、特に東アジアの研究者との連携も重視するようになった。

2000年以降は、中国研究が専門のワシントン大学のタニ・バーロウ教授の招聘を機に、アジアからの研究者を招聘することを企図した。（以下敬称略）そこで2003年５月-2003年７月には、何春蕤（台湾国立中央大学教授）、続けて2003年10月-2003年12月には、戴錦華（中国 北京大学比較文学・比較文化研究所教授）、2004年１月-2004年３月には、李小江（中国 大連大学性別研究センター教授兼センター長）、2004年11月-2005年１月には、金恩実（韓国 梨花女子大学女性学部准教授兼アジア女性学センター長）を招聘した。

その後2004年４月に国立大学が法人化し、文科省による定員枠として継続的に外国人客員研究員の招聘が認められることは無くなった。しかし、これまで27人の外国人客員研究員を招聘して夜間セミナーを開講してきたことは、日本のジェンダー研究の展開に幾ばくかの貢献をしたと思われる。

本書は、こうした意図のもとに何春蕤（Josephine Ho）を招聘して開催したIGSのセミナーの意義を伝えるべく編まれた。

何春蕤の夜間セミナーは、「東アジアにおけるジェンダー／セクシュアリティ理論と政治の諸課題」と題して、全５回の講義で構成された。本書は、何春蕤の５回の講義とコメンテーター報告、そして今回、何春蕤が書き下ろした４論文と既発表の１論文、そして終章に、編者と翻訳者による、何春蕤教授へのインタビューのまとめを加え、編集・刊行したものである。なお、セミナーは、当時IGS教授であった伊藤るりと同研究機関研究員の秋林こずえが担当し、本書の翻訳もその時の翻訳を基にした。

本書の構成は、以下の目次にある通りである。

日本の読者へ　　何春蕤
序章
第一章　バックグラウンド――もはや単純ではないジェンダー・ポリティクス
第二章　ポルノグラフィと女性の性的行為主体性
　　コメント　　根村直美
第三章　セックスワークにおけるセルフ・エンパワーメントと職業的行為遂行性

――なぜフェミニストはセックスワーカーを読み解くことができないのか
コメント　　水島　希
第四章　スパイス・ガールズから「援助交際」へ
――台湾におけるティーンの少女たちのセクシュアリティ、そのいくつかの編成体
コメント　　田崎英明
第五章　反人身売買から社会的規律へ――台湾における「女性運動」の役割の変遷
コメント　　竹村和子
第六章　アイデンティティの具現化――トランスジェンダーの構築
コメント　　三橋順子
第七章　トラブルの撲滅――ある訴訟の捏造
第八章　トラブルの統御――台湾におけるグローバル統治とクイアの存在
第九章　トラブルの統治――台湾のジェンダー・ポリティクスにおける「年齢」的転回
第十章　ジェンダー統治をめぐる新たな政治
終章　　何春蕤へのインタビュー　　舘かおる・大橋史恵・張瑋容
編者あとがき、関連年表及び参考文献

台湾におけるセクシュアリティ／ジェンダー研究の指導的研究者として知られる何春蕤は、中国語の単著や編書として、『豪爽女人：女性主義與性解放』（1994）、『性心情：治療與解放的新性學報告』（1996）、『性／別校園：新世代的性別教育』（1998）、編著に『性工作研究』（2003）、『跨性別』（2003）『連結性―兩岸三地性／別新局』（2010）など多数の著書、編書がある。

何春蕤が、台湾社会において、特にセクシュアリティに関わる研究と運動に多大な影響を与えたことは確かであり、例えば、台湾女性史入門編纂委員会編『台湾女性史入門』（2008）での「性解放運動」の項目には、「1987年の台湾における戒厳令の解除後に表現の自由が解放され、メディアには『性』の話題が溢れだした。当時のフェミニストは、立法化と社会解放運動を通して、ポルノ、少女売春、レイプ、セクシュアルハラスメントなどの、女性の身体を搾取したり、物のように扱う現象をなくすことをめざした」が、こうした女性運動の高まりの中で何春蕤は、「性の解放運動を呼びかける『豪爽女人』を出版し、戒厳令解除初期の台湾を驚愕させた」と、何春蕤がもたらしたインパクトが記述されている。

台湾の近年の動きについては、文学領域でも、黄英哲・白水紀子・垂水千恵編『台湾セクシュアル・マイノリティ文学シリーズ』全四巻（2008-2009）が日本で刊行されている。同書には、ゲイ、レズビアン、トランスジェンダー、クイアなどの性的多様性を主題にした、長篇や中・短篇小説や評論が収められている。同書では、刊行の意図を、中国に比して台湾では、セクシュアル・マイノリティ文学が質量ともに社会的に認知され、政治と性を考える上でも興味深い観点となっていると述べている。

本書の終章では、私たちのインタビューに応えて、何春蕤は「動物性愛ウェブ頁事件」にみる当時の台湾社会の状況、台湾におけるセクシュアリティ認識の大きな転回、フェミニズムやトランスジェンダー等の性の多元的差異の容認と政策・法律等改正と運動団体との関係などにつき、具体的に語っている。運動を重視し、過激で活動的と見做されていることが多い何春蕤であるが、彼女の語りから、決して表層的ではない、何春蕤の理論と運動の関係性の理解を深めることになろう。

このような、何春蕤のチャレンジングな精神に呼応して、本書のタイトルも、夜間セミナーでのタイトルではなく、新たに『「性／別」攪乱――台湾における性政治』と題することにした。何春蕤の仕事の内実は、まさに夜間セミナーのタイトルにあるように、ジェンダー／セクシュアリティの「理論と政治」に他ならないのであるが、それを「性／別」攪乱と表現する卓見に、何よりも瞠目したからである。ジェンダー／セクシュアリティ研究を漢字文化圏において、激烈と言えるまでに真摯に追究してきた、何春蕤の格闘を如実に示す言葉として、「性／別」攪乱という表現以外にあり得ないと思えた。

さらに、ジェンダー研究センターという名称の大学組織に所属している私は、何春蕤の表現の創造性に強い感動をおぼえた。何春蕤は、国立中央大学性／別研究室の創設者であり、創設以来のコーディネーターである。同研究センターの名称は、漢字では「性／別研究室」とあり、英語では、Center for the Study of SEXUALITIESと表記している。何春蕤らの「性／別」研究は、英語表記では、大文字の複数形の SEXUALITIESが当てられており、いわゆるセックス、ジェンダー、セクシュアリティをダイナミックに再編した、The Study of SEXUALITIESの創成を意図し、その実現を目指し続けていると思われたからである。

「性／別」研究室という表記には、何春蕤並びに「性／別」研究センターの教員たちの熟考する姿が込められている。翻って日本では、英語をカタカナに置き替え、「ジェンダー」「セクシュリティ」「セックス」と表記し、その国、地域の歴史的、文化的、社会的、政治的文脈を踏まえ、その概念を思考し抜く努力を怠りがちな学術界の状況を突かれた思いがした。

近年では、日本の研究者と台湾の研究者の交流の機会も増え、互いにジェンダー／セクシュアリティの研究を紹介しあい、論じる機会もふえてきた。本書も、その一端を担うことができればと願っている。

（たち・かおる／お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授）